地域住民と学生の協働による地域づくり活動とその効果
－「eimon park bazaar（栄門パークバザール）」を事例に－

Regional Development Activities through Collaboration between Local Residents and Students and Their Effects：「eimon park bazaar」in Kagoshima City

岡田　登[1]
OKADA Noboru

要旨

本研究では鹿児島市栄門地区の「eimon park bazaar」を事例に，栄門地区の地域性や「eimon park bazaar」の運営形態を把握したうえで，学生が地域住民との協働によって栄門地区という学ぶ場をどのように捉えるようになったのかを明らかにした。「eimon park bazaar」は人々をつなげ，地域に新たな価値を生み出すことで，栄門地区を住み続けられるまちへと導いている。鹿児島県立短期大学の学生は 2020 年から栄門地区の活動に参加し，第 3・4 回の「eimon park bazaar」から企画・運営や地元企業へ協力依頼を通して地域の人々と深く関わっている。栄門地区の地域づくり活動は地域住民主体で内発的に行なわれ，地域に新たな価値を生み出すような取り組みだからこそ，学生はその地域住民の姿に惹かれて協働し，まちへの愛着やつながり，まちを学ぶ姿勢を持つことができていると考えられる。

キーワード：地域住民，学生，協働，地域づくり，関係人口，鹿児島市栄門地区

Ⅰ　はじめに

バブル経済の崩壊以降，1990 年代後半から農村で本格化した地域づくりは，地域活性化に代わる用語として使用されてきた。地域づくりには次の 3 つが含意されている。第 1 は内発性の強調であり，自らの意思で地域住民が立ち上がるというプロセスを持つ取り組みの重要性である。第 2 は経済的な活況だけではなく，文化，福祉，景観等も含めた総合的な目的である。第 3 は革新性であり，地域における意思決定の仕組みや行政との関係性等を含めた地域革新のニュアンスを含む。すなわち，多様な総合的目的をもち，地域の仕組みを革新しながら，内発的に新たな地域をつくることが，地域づくりとされている（小田切 2013・2018）。

このような状況下で，地域から大学に対する要請も増しており，地域の発展に大学がどのように関わっていくべきかという議論も行なわれている（山田 2017）。東北地理学会の機関誌『季刊地理学』では, 2017 年 69 巻 1 号で特集「地域連携事業に対する大学の役割」が組まれており，大学または研究室が地域調査や分析を通して課題解決に向けて提案している事例や，学生と地域住民との共同作業の事例が報告されている（岩動 2017，桒田

1　鹿児島県立短期大学

2017，初澤 2017，山田 2017）。

一方，大学でのフィールドワーク教育も多様化しており，観察方法の伝授を目的とするだけではなく，地域住民との協働による地域づくりの実践も進んでいる。中川（2019）は，大学におけるフィールドワーク教育を単に観察のための方法，認識の発達のためのものに押しとどめることなく，地域と学生の双方にもたらす積極的な効果を高める可能性を検討しており，これを地域参画型フィールドワークと呼んでいる。経済地理学会の機関誌『経済地理学年報』では，2019 年 65 巻 1 号で特集「「関係人口」からみた大学教育における地域フィールドワーク」が組まれている。この中で，作野（2019）は都市農村関係から関係人口を地域支援志向型，スローライフ志向型，地域貢献志向型，非居住地域維持型の 4 つに類型化して，各類型の特徴を整理している。そのうえで本特集では，農村部において多様な地域参画型フィールドワーク教育の実践例を紹介しており，関係人口の観点から大学における取り組みの意義と課題を検討している（大貝ほか 2018，河本 2018，新名 2018，林 2018，宮地 2018）。

関係人口とは，移住した「定住人口」でもなく，観光に来た「交流人口」でもない，新たな考え方である（指出 2016，高橋 2016，田中 2017）。2019 年の第 2 期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」では，関係人口は「特定の地域に継続的に多様な形で関わる者」と定義されている。これらで論じられている関係人口とは，農村や地方に関心を持つ都市住民という文脈で語られているが，田中（2021）は都市―農村論の枠組みの中でのみ定義づけることによって，都市でも関係人口が生まれる可能性を切り捨てるおそれがあると指摘している。そのうえで，地域に関わる人を空間，時間，態度の 3 点から検討し，関係人口を「特定の地域に継続的に関心を持ち，関わるよそ者」と定義している。地域参画型フィールドワークを考えるならば，それは必ずしも農村部においてのみ実践されているわけではない。

本研究で取り上げる鹿児島市栄門地区の「eimon park bazaar（栄門パークバザール）」は，都市中心部の近郊で鹿児島県立短期大学の学生が地域住民と協働で行っている地域づくり活動である。鹿児島県立短期大学のある栄門地区に居住している学生は少なく，主に学ぶ場として継続的に関りを持つ関係人口である。栄門地区に居住している学生であっても在学中の 2 年間のみ住民となるため，よそ者としての性格が強い。そこで，本研究では鹿児島市栄門地区の「eimon park bazaar」を事例に，栄門地区の地域性や「eimon park bazaar」の運営形態を把握したうえで，学生が地域住民との協働によって栄門地区という学ぶ場をどのように捉えるようになったのかを明らかにする。

Ⅱ　栄門地区の地域性

栄門地区は鹿児島中央駅から北へ約 3km に位置する国道 3 号線沿いの下伊敷一丁目を中心とした地域のことである（図 1）。1889 年に上伊敷村，下伊敷村，小山田村，犬迫村，小野村，永吉村，比志島村，皆房村の 8 村が合併して伊敷村となったが，1950 年に伊敷村が鹿児島市に合併したことに伴って旧下伊敷村が下伊敷町となった（「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1983）。1995 年には下伊敷町の一部が下伊敷一丁目に町名変更されている。

現在の下伊敷一丁目には，1897 年に陸軍歩兵第四十五連隊が置かれ，1898 年には全兵

舎が完成して約 2,000 人の将兵が起居していた。鹿児島県立短期大学の辺りに営門（写真 1）と本部，その近くに旅団司令部，玉江小学校の辺りに将校集会所や大隊の兵営，下士官集会所，自動車学校から伊敷中学校の辺りに練兵場が設置されていた。1912 年に鹿児島市で路面電車[2]が開通すると，1920 年には現在の自動車学校前まで延伸された。第二次

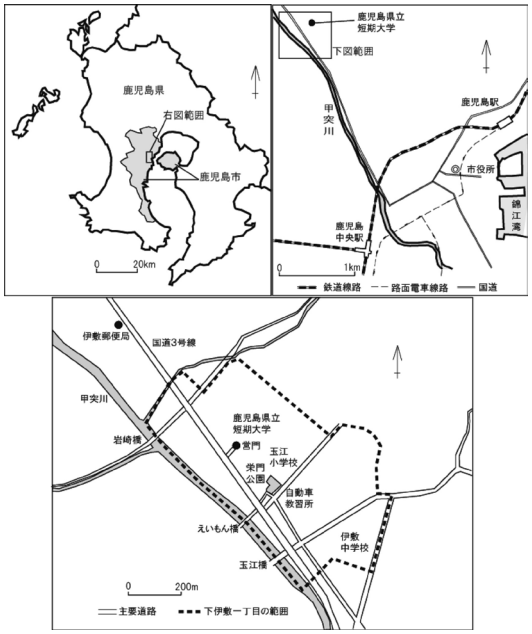

図 1　鹿児島市下伊敷栄門地区の概要図（2023 年 1 月）
（筆者作成）

写真 1　営門
（2022 年 12 月 8 日：筆者撮影）

2　1953 年に路面電車は国道 3 号線に移されて複線化し，1959 年には伊敷郵便局前まで延伸されたが，1985 年に伊敷線は廃止されている。

大戦後には陸軍歩兵第四十五連隊の兵舎や練兵場の跡地は教育機関や住宅地として利用され，営門の表記は栄門に変わって名称が引き継がれた。栄門公民館に展示されている資料によれば，1897 年の陸軍歩兵第四十五連隊の設置に伴って，国道沿いに営門集落が誕生したと記されている。第二次大戦後の 1955 年には国道 3 号線沿いの商店街組織として栄門通り会，1961 年には栄門町内会が発足した。さらに，1964 年に栄門公園，1971 年に栄門公園隣の栄門公民館，1972 年にえいもん橋が建設された。このように栄門という名称が地区内の組織や施設にみられる（鹿児島市 1950，伊敷地域まちづくりワークショップ 2017，栄門公民館展示資料）。すなわち，栄門地区は陸軍第四十五連隊の設置に伴って集落が形成され，それと共に発展してきたため，住民は歴史的な経緯を重んじて下伊敷よりも栄門という地名を使用していると考えられる。

Ⅲ　「eimon park bazaar」の運営展開

空き家や空き店舗が増加している栄門地区に活気を取り戻すために，栄門通り会の坂口氏が食品・雑貨の販売やワークショップを主とする「eimon park bazaar」を発案し，2019 年 5 月 19 日（日）に第 1 回目が開催された（表 1）。第 1 回目には栄門通り会が栄門町内会の協力を得ながら，ここで学ぶひと，働くひと，暮らすひとたちがつながること，すなわち「つながるこのまち」をコンセプトにし，「栄門地区内外の人たちとのつながり，地

表 1　「eimon park bazaar」における運営方法の変遷

	第1回	第2回	第3回	第4回
開催年	2019年	2019年	2022年	2022年
開催日時	5月19日（日） 11時～16時	11月17日（日） 10時～15時	5月14日（土）前夜祭 17時～19時 5月15日（日）当日 11時～16時	11月20日（日） 11時～15時
場　所	栄門公園	栄門公園 国道3号線沿い	栄門公園 甲突川	栄門公園 甲突川
主　催	栄門通り会	栄門通り会	栄門 つながる このまち 実行委員会	栄門 つながる このまち 実行委員会
共　催 協　力	栄門町内会	栄門町内会	栄門通り会 栄門町内会	栄門通り会 栄門町内会
目　的	栄門地区内外の人たちとのつながり 地域コミュニティの活性化 起業機会の場 まちの魅力向上 子供たちの思い出づくり	地域内外が繋がる場の創出 地域活力の活性化 地域の魅力向上 公共空間の活用	栄門の持つ可能性を最大限に活かし、ひと・まち・歴史がつながることで地域を活性化すること	まちと学校、商店街、町内会と連携をとりながら、まちの資源を活かす事で、住んでみたい、住んでよかったまちを目指す
コンセプト	つながる このまち	栄門の空いている空間を利用する	まちを回遊しながら楽しむ	おとなも、こどもも、たのしむ
補助金	―	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島県
協賛金 出資企業	―	39社	54社	47社
出店数	29店舗	59店舗	29店舗	32店舗
来場者	約1,000人	約3,000人	約1,200人	約1,500人

（栄門 つながる このまち 実行委員会の資料により作成）

域コミュニティの活性化，まちの魅力向上，子供たちの思い出づくり」を目的に栄門公園で実施した（図 2）。 第 1 回目の出店数は 29 店舗，来場者数は約 1,000 人であった。第 2 回目は 2019 年 11 月 17 日（日）に栄門通り会が「栄門の空いている空間を利用する」をコンセプトに，栄門公園だけでなく国道 3 号線沿いの店舗の軒先，駐車場，空き店舗を活用し，規模を拡大して実施した（図 3）。第 2 回目は鹿児島市の補助金，地元企業 39 社による協賛金，59 店舗の出店料を基に運営され，鹿児島県立短期大学の県大祭も同日に実施されたこともあって来場者数は約 3,000 人まで増加した。しかしながら，翌年から新型コロナウイルスの感染が拡大したため，第 3 回目を 2020 年 5 月 17 日（日）に予定していたが中止となり，その後も開催が見送られてきた。

図 2　第 1 回 eimon park bazaar の概要図
（栄門 つながる このまち 実行委員会の資料より引用）

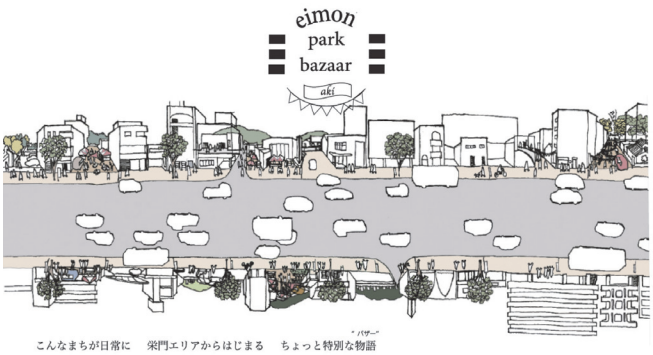

図 3　第 2 回 eimon park bazaar の概要図
（栄門 つながる このまち 実行委員会の資料より引用）

2022 年に新型コロナウイルスの影響による人々の行動制限やイベント等の開催制限が緩和されると，地元の有志によって「栄門 つながる このまち 実行委員会」が設立され，この組織が栄門通り会や栄門町内会の協力を得ながら，「eimon park bazaar」の企画・運営を再開した。2022 年 5 月 14 日（土）には竹灯籠の点灯による前夜祭が行なわれ，翌日の 5 月 15 日（日）に規模縮小と徹底した感染対策の下で第 3 回目が開催された。第 3 回目は「まちを回遊しながら楽しむ」をコンセプトに，栄門地区の地域資源である栄門公園と甲突川沿いを活用し，「栄門の持つ可能性を最大限に活かし、ひと・まち・歴史がつながることで地域を活性化すること」を目的に実施された（図 4）。栄門地区では陸軍第四十五連隊の跡地に教育機関が多く立地しているため，第 1 回目から協力している鹿児島工業高等学校に加えて，玉江小学校，伊敷中学校，鹿児島女子高等学校，鹿児島県立短期大学も参加した。第 3 回目は鹿児島市の補助金，地元企業 54 社による協賛金，29 店舗の出店料を基に運営され，来場者数は約 1,200 人まで回復した。

図 4　第 3 回 eimon park bazaar の概要図
（第 3 回 eimon park bazaar のチラシの裏面より引用）

第4回目は2022年11月20日（日）に「おとなも、こどもも、たのしむ」をコンセプトとして，第3回目と同様に栄門公園と甲突川沿いを活用し，SDGs 11番目の目標である「住み続けられるまちづくりを」の観点を取り入れて，「まちと学校、商店街、町内会と連携をとりながら、まちの資源を活かす事で、住んでみたい、住んでよかったまちを目指す」を目的に実施された（図5・6）。この回から鹿児島大学教育学部附属特別支援学校も加わり，各学校や企業がワークショップ，活動展示，活動発表を運営したことで，栄門公園と甲突川沿いに回遊性だけではなく，滞在型の空間が創出された（図7）。第4回目は鹿児島県の補助金，地元企業47社による協賛金，32店舗の出店料を基に運営され，来場者数は約1,500人まで増加した。

このように「eimon park bazaar」は新型コロナウイルスの影響を受けながらも，栄門地区に活気を取り戻すために継続的に実施されてきた。第3回目以降には，「栄門 つながる このまち 実行委員会」が地元の学校，商店街，町内会，企業と連携し，地域資源である栄門公園や甲突川沿いを活用して回遊性と滞在型の空間を創出してきた。すなわち，「eimon park bazaar」は人々をつなげ，地域に新たな価値を生み出すことで，栄門地区を住み続けられるまちへと導いている。

Ⅳ　地域住民と鹿児島県立短期大学の学生による協働

鹿児島県立短期大学商経学科の岡田ゼミは2016年度から始まり，「地域づくり」と「地域活性化」をテーマに地域調査のフィールドワークを実施していたが，2017年から学生の要望によって地域参加型フィールドワークを開始した。同年から学生は学内サークルとして「地域もりあげ隊」を立ち上げ，ゼミ以外の学生も巻き込んで地域活動に取り組んでいる。これまでに学生は南日本リビング新聞社主催の「かごしまバル街」，鹿児島県農業法人協会主催の「ファーマーズマーケット」，日置市美山地区の「美山の朝マルシェ」

図5　第4回 eimon park bazaar のポスター
（第4回 eimon park bazaar のポスターより引用）

図６　第４回 eimon park bazaar の概要図
（第４回 eimon park bazaar のチラシの表面より引用）

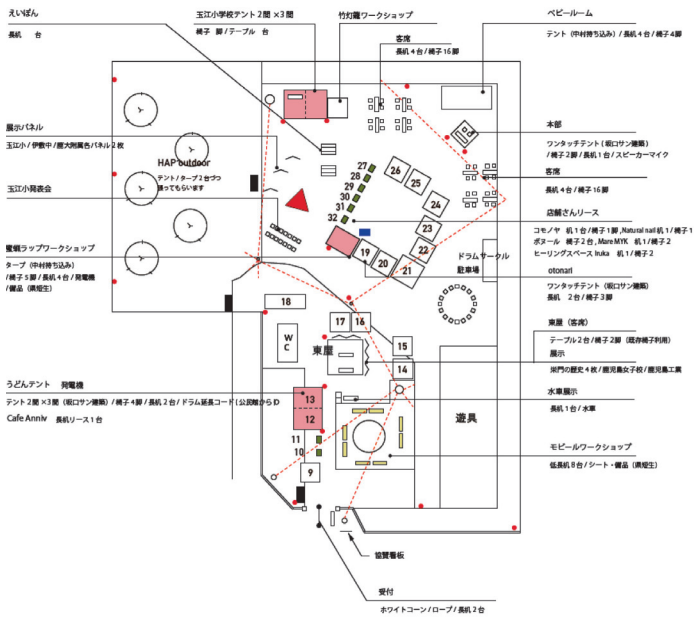

図７　第４回 eimon park bazaar の栄門公園内の概要図
（栄門 つながる このまち 実行委員会の資料より引用）

の運営に携わってきた。2020 年度からは栄門地区の住民と共に活動を開始した。まず，2020 年 12 月に栄門通り会が鹿児島市の補助金を受けてプレミアム付商品券 を発行した（図 8）。これに際して栄門通り会がオリジナルフリーペーパーを作成し，プレミアム付商品券の購入者に配布した。オリジナルフリーペーパーには商店街の店舗紹介，グルメ情報，栄門地区の紹介が掲載された（図 9）。学生も紙面の企画に携わり，2020 年 10 月 20・27 日に栄門地区を巡って調査した。その結果，国道 3 号線の少し外れには，甲突川沿いのような静かな場所が多く存在していたため，これらの場所が「岡田ゼミのええもん散歩」のおすすめスポットとして紹介された（図 10）。2021 年 12 月 14・21 日には新入学生も栄門地区を巡って調査したが同様な感想であり，栄門公園や甲突川沿いを栄門地区の特徴としてあげていた。

図 8　栄門通り会プレミアム付商品券
（栄門通り会プレミアム付商品券より引用）

図 9　栄門通り会プレミアム付商品券特別号の栄門地区巡りマップ
（栄門通り会プレミアム付商品券特別号より引用）

3　2020 年 12 月 17 日から 2021 年 3 月 31 日までに地元商店街で使用できる商品券を 10,000 円で 13,000 円分購入できる。

図 10　栄門通り会プレミアム付商品券特別号の岡田ゼミのええもん散歩記事
（栄門通り会プレミアム付商品券特別号より引用）

2022 年に第 3 回目の「eimon park bazaar」の開催が決定すると，学生は「栄門 つながる このまち 実行委員会」と共に企画・運営を行なった（図 11）。企画会議は 2022 年 2 月から開始され，コロナ禍により遠隔会議を中心としながらも，栄門公民館やゼミの授業時間を利用して行なわれた。地域住民と学生は第 3 回目と第 4 回目の開催に向けて，合計で 30 回程の打ち合わせを重ね，不足分を SNS の活用で補った。これら以外にも，学生は授業の空き時間で備品を作り，地元企業へ協力依頼にも出向いた（写真 2）。第 3 回目では学生が栄門地区の地域資源である栄門公園と甲突川沿いを活用することを提案し，コンセプトの「まちを回遊しながら楽しむ」を実現させるために「栄門謎解き街歩き」の企画を実行し，企画を通して参加者を栄門公園から甲突川沿いへ誘導した（図 12）。この結果，第 3 回目では地域資源を活用した新たな人の流れが生まれ，学生がまちの特徴としてあげていた甲突川沿いに，水辺空間としての新たな可能性を見出すことができた（写真 3）。しかし，第 3 回目では「eimon park bazaar」に回遊性は生まれたが，栄門公園での滞在時間の短さが新たな課題になった。このため第 4 回目では回遊性プラス滞在型を目指し，コンセプトの「おとなも、こどもも、たのしむ」を実現させるために，学生は「モビールづくり」と「蜜蝋ラップづくり」のワークショップを企画して実行した（図 13）。「モビールづくり」は学生の希望によって栄門公園入口のメイン広場で実施されたが，親子を中心に多くの参加者で終始賑わった（写真 4）。「蜜蝋ラップづくり」ではオリジナルカップの販売も合わせて行なわれ，幅広い年齢層の参加があった（写真 5）。鹿児島工業高等学校による竹灯籠づくりと共に，これらのワークショップの参加者には甲突川沿いでドリンクが無料で提供された。これによって学生は参加者を栄門公園から甲突川沿いまで誘導できた（写真 6）。

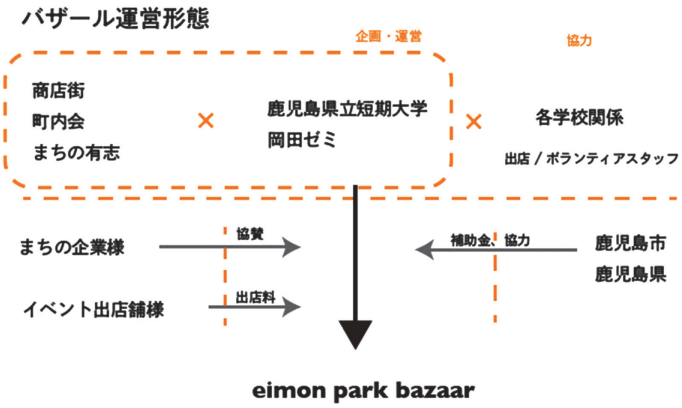

図 11　第 3・4 回 eimon park bazaar の運営形態の概要
（栄門 つながる このまち 実行委員会の資料より引用）

写真 2　学生が作製した eimon park bazaar のウェルカムボード
（2022 年 5 月 15 日：筆者撮影）

図 12　第 3 回 eimon park bazaar の「栄門謎解き街歩き」の概要
（第 3 回 eimon park bazaar の当日配布パンフレットの裏面より引用）

写真 3　第 3 回 eimon park bazaar の甲突川付近
（2022 年 5 月 15 日：筆者撮影）

図 13　第 4 回 eimon park bazaar の学生ワークショップの概要
（栄門 つながる このまち 実行委員会の資料より引用）

写真 4　第 4 回 eimon park bazaar のモビールワークショップ
（2022 年 11 月 20 日：筆者撮影）

写真 5　第 4 回 eimon park bazaar の蜜蝋ラップワークショップ
（2022 年 11 月 20 日：筆者撮影）

写真 6　第 4 回 eimon park bazaar の甲突川付近
（2022 年 11 月 20 日：筆者撮影）

このように鹿児島県立短期大学の学生は「eimon park bazaar」の企画・運営の打ち合わせや地元企業へ協力依頼を通して，地域の人々と深く関わってきた。とくに，学生は地域住民と同じ目的を持って意見交換を続けてアイデアを出し，それを実行してきた。このような地域住民との協働による地域づくり活動の過程によって，学生は栄門地区をどのように捉えるようになったのか，何が学生の意識に影響を与えているのか，これらの点について次章で分析する。

Ⅴ　地域住民と学生の地域づくり活動による効果

第 3 回と第 4 回の「eimon park bazaar」には合計 34 人の学生が企画準備または当日運営に参加した（表 2）。参加者は第一部商経学科の経済専攻と経営情報専攻の学生と第二部商経学科の学生である。第 3 回で企画準備から参加したのは 8 人であったが，その後に第 3 回目の当日運営に参加した 2 年生や新規の 1 年生も企画準備段階から参加したことで，第 4 回目の企画・運営は 20 人に増加している。当日運営者は第 3 回目 23 人，第 4 回目 21 人である。このうち No1 から No8 はゼミの 2 年生であるが，両回とも企画・運営に深く関わっているため，8 名に対してアンケート調査を行なった。

アンケート内容は「eimon park bazaar に関わった感想」と「自分にとって栄門地区とは何か」との問いである（表 3・4）。学生は「eimon park bazaar」の企画・運営に携わり，表 3 の No5「ゼミ生全員で協力し合っていいものができた」のように，学生同士で協力して取り組み，自主性と物事を成し遂げた達成感を得ている。そのうえで，学生による栄門地区の捉え方の変化をみると，当初は共通して学校に通うだけのまちであったが，表 4 の No1「自分が住んでいる所とは別のもう一つの地元というイメージに変化した」，No2 の

表 2　「eimon park bazaar」における学生の参加状況（2022 年）

No	学科	学年	第3回		第4回	
			企画準備	当日運営	企画準備	当日運営
1	一部商経	2	○	○	○	○
2	一部商経	2	○	○	○	○
3	一部商経	2	○	○	○	○
4	一部商経	2	○	○	○	○
5	一部商経	2	○	○	○	○
6	一部商経	2	○	○	○	○
7	一部商経	2	○	○	○	
8	一部商経	2	○	○	○	
9	一部商経	2		○	○	○
10	一部商経	2		○	○	
11	一部商経	2		○		○
12	一部商経	2		○		○
13	一部商経	2		○		○
14	一部商経	2		○		
15	一部商経	2		○		
16	一部商経	2		○		
17	一部商経	2				○
18	一部商経	1			○	○
19	一部商経	1			○	○
20	一部商経	1			○	○
21	一部商経	1			○	○
22	一部商経	1			○	○
23	一部商経	1			○	○
24	一部商経	1			○	○
25	一部商経	1			○	○
26	一部商経	1			○	○
27	一部商経	1			○	
28	一部商経	1		○		○
29	一部商経	1		○		
30	一部商経	1		○		
31	一部商経	1		○		
32	一部商経	1		○		
33	二部商経	3		○		
34	二部商経	3		○		
	合計		8人	23人	20人	21人

（eimon park bazaar 参加記録により作成）

表3　eimon park bazaar に関わった感想

1	普通の学校生活を送るだけでは経験できないようなことをたくさん経験することができた．まず，初めて一から運営に携わり，当日までの忙しさや，どうやったらうまくいくかを考える難しさを知った．話し合いを重ねていく度にやらなければいけないことが増えていき，忙しかったけれど，バザールを終えた時は，達成感はもちろん，来年からは運営として携わるのは難しいという寂しさもかなりあった．そして，1回目に携わった時よりも2回目は自分の意見を発することができ，成長することもできたと思う．また，自分で提案した案が，みんなの意見で膨らみ，実現されたこと，それを小さな子供からその保護者，おばあちゃんまで様々な世代の方がそれぞれの楽しみ方で楽しんでくれたこと，これはとても嬉しかった．参加できたのはたったの2回だったかも知れないが，学生生活中に本気で取り組めるものに出会え，貴重な経験をすることができて良かった．卒業後，就職しても何らかの形で関わっていきたい．
2	学生生活においてバザールの企画や運営に携われたことは大きな思い出となり，そしてこれからの目標を見つけるきっかけにもなった．高校生の頃から地域活性化に興味があって勉強してきた．このお話をいただいた時は，学んだ知識を実際に活かす経験ができるととても嬉しかった．企画の段階では，ただイベントを開催するのではなく栄門地区にある問題を取り上げて，災害に強い，環境に優しい，住み続けたいまち，といった意味づけをすることで，参加するだけで誰でも栄門に貢献でき，自分のまちに誇りをもってもらうことができた．これからも続いていく栄門の取り組みに関わり続け，応援していきたいと思っている．そしてこの栄門での活動を原点に，もっと幅広く地域活性化を目指してこれからも頑張りたい．
3	地域イベントは楽しいしワクワクするなと感じた．毎日当たり前のように歩いている通勤・通学路にキッチンカーなどの食べ物屋や体験イベント，人があふれているだけでいつもと景色が変わり，凄くワクワクした．自分の地元ではこういったイベントがなかったので，住んでいるまちでこのようなイベントが開催されていて羨ましいと思った．そのようなイベントに運営として携わり，イベントを栄門地区の実行委員の方と共につくりあげることができて嬉しかった．イベントの運営に実際に携わって感じたことは，イベントをつくりあげるには運営側の団結力も必要だが，住民の方からの理解と協力が1番重要であった．協賛金やポスター・チラシ，ごみの設置や駐車場の貸し出しなど多くの住民の方からの理解と協力があり，成り立っているイベントである．この運営経験を通して，まちを盛り上げるためのイベントには，住民の方の理解と協力は欠かせず，共につくりあげていくものなのだと感じた．
4	まちの方と一緒に活動することで，通学しているだけでは知ることのできなかった栄門の歴史や栄門ならではの良さを身近に感じることができた．企画の段階からバザールに携わり，2回の参加を通して，イベントを運営することの難しさとイベントを成功させる達成感を味わった．バザール開催後の反省では課題が残り，次の開催に向けて改善策を考えるのは難しかった．しかし，毎回少しずつ改善していくことで，運営する側も楽しく，来てくださる方にも楽しんでもらえるようなバザールになっているように感じ，前向きに活動することができた．その中でも1番印象に残ったことはモビール作りであった．子どもから大人まで幅広い年代の人が参加してくださり，準備は大変なこともあったが，最後には「楽しかった」「ありがとう」と声をかけていただく場面もあり，とてもやりがいを感じた．今後，直接でなくても関わっていけるといいなと思った．
5	大変だったけど楽しかった．謎解きの準備をしたときは，ゼミ生全員で協力し合っていいものができたと思った．モビールとミツロウラップに分かれてミツロウラップの班になったときも心配しかなかった．結果はあまりうまくはいかなかったけど，一緒の班になった人たちが意見を出し合って協力して準備を進めていっていい雰囲気だったのではないかと思う．
6	企画，運営を関わることができ，いい経験ができたと実感している．企画の段階では，自分のこれまでの経験を活かしながら，どうすればより多くのお客さんが来場してくれるか，イベントの目的と深く結びつけられるかを第1に考え，企画を練っていった．一緒に運営をする栄門の方々と企画会議をする中で，自分の意見を聞いてもらい，反映してもらえたことがうれしく，自分の中でボランティア活動のやりがいや楽しさを感じることができた．本番当日の運営では，人前で話すことが苦手で，自分では難しいと思っていたが，自らお客さんに対し，説明や進行を積極的に挑戦したことで自分の成長を感じることができた．また，お客さんの喜んでいる姿や楽しそうな表情を見て，この栄門バザールの企画，運営をしてよかったと思った．これまでイベントに対してここまで深くかかわることはなかったが，深くかかわるからこそ，大変さやイベントを計画する難しさを感じることができた．そして，参加する側から運営する側になり，新たな視点で見ることができ，イベントスタッフとしての魅力を知ることができた．
7	1番強く感じたことは栄門というまちを大切にしている人が多いということだった．とくに栄門通り会の皆さんは栄門地区がこれからもたくさんの人とお店で賑わっていって欲しいという思いから，どのような企画が大切になってくるかということをとても考えていた．栄門地区には学校が密集していることから子供向けと大人向けどちらも楽しめるイベントをと沢山の案を出されていて地域のことをとても大切にされている印象を受けた．また，協賛金係として栄門地区内で様々なお店を回ったが，「楽しみにしてます」「頑張ってね」といったお声がけをして頂き，イベントに協力して下さる店舗さんや，まちのために何かしたいと思って下さる人が多い素敵なまちだなと感じた．また，運営側として関わらせて頂いたことで，出店や人員管理，Instagramのアカウント運営や，イベントまでの日数調整など，運営していくことの大変さと成功した時の満足感を得ることができ，普段の生活では体験できないことを知る貴重な機会になった．
8	初めて運営側としてイベントに携わった．準備から当日まで様々な仕事に取り組む中で，とくにまちの人々とのつながりを強く感じることができた．中でも，とくにつながりを強く意識した場面が大きく3つある．1つ目は，運営の方々とのつながりである．バザール開催に当たり，運営内では毎週会議が開かれる．運営には，栄門に住んでいたり，現在栄門に通っていたりと様々な方が所属しているが，そのようなメンバーが一堂に会し，全員でバザールの開催・成功に向けて歩みを進める様子からは強いつながりを感じた．2つ目は，まち全体のつながりである．運営では，毎回栄門地区にある様々な店舗に協賛金をお願いしに回る．その際，私たちの話を親身になって聞き，多くの店舗が快く協賛金を差し出して下さったことで，まち全体のつながりを意識した．3つ目に，バザール参加者とのつながりである．当日，会場となっている栄門公園の来場者は第3・4回共に1200人を超えた．来場者は，近くの小中学校に通う学生から市外に住む方まで様々である．それら全ての方々が，バザールを楽しみに栄門の地に訪れ，様々な体験をし，そして笑顔で帰路に就く様子を見て，参加者とのつながりを強く感じた．以上のような3つのつながりを感じられた栄門パークバザールは，栄門地区のつながりを今後更に強め，広めていくような，そんな可能性が秘められているイベントだと感じた．

注）数字は表2の番号　　下線部は本文での引用部分

（アンケート調査により作成）

表4　自分にとって栄門地区とは何か

1	自分が住んでいる所とは別のもう一つの地元というイメージに変化した．バザールを通してまちと深く関わる前までは，ただの通っている学校のあるまちという印象でとくにそれ以外思うことはなかったが，まちの人と関わったり，まちのことを知っていくうちに，こんな店や公園や歴史があったんだ，こんなに多くの学校があったんだ，と発見が多く，知れば知るほど，地元のような愛着が湧いた．栄門地区に住んでいるわけではないけれど，住んでいるのと同じくらい，またはそれ以上に地元の方とも関わることができ，自分のコミュニティが1つ増えたような感じがした．卒業後，栄門地区に足を運ぶ回数は減ってしまうと思うが，バザールの度に栄門を訪れて，主催者側としてではなく参加者として楽しんだり，用事があって訪れた時に思い出したりと，これからも様々な形で関わり続けていくと思う．
2	「学校があるから通っているまち」から「もっとにぎやかに，元気に，笑顔になってほしいまち，していきたいまち」に変わった．関わるまでは栄門にどんな店や学校，歴史があるのかも知らずにいた．実際に栄門の方々に出会ってみると，まちを盛り上げたい，にぎやかなまちを取り戻したいという熱い想いが伝わり，私もこのまちに携わりながらもっと元気で笑顔溢れるまちにしたいと思うようになった．自分たちが企画したイベントで参加してくださった皆さんが笑顔になる瞬間を沢山見ることができた．とくに，お子様だけでなく親子で楽しんでいる姿はこちら側も幸せな気持ちになった．活動をしていると，どんどんこの栄門のまちに愛着が湧いてきて，大好きなまちになった．この栄門のまちとの出会いを忘れずにこれからも関わり続け，見守っていきたい．
3	地元が栄門地区ではないため，eimon park bazaarに参加するまでは，正直ただの学校・アルバイト先への通勤・通学路でしかなかった．しかし，eimon park bazaarの運営に携わり，栄門地区に深くかかわるようになって住民との交流の機会が増えた．このイベントを通して通うようになったお店も何店舗かある．ここへきてまだ2年も経っていないため，第2の故郷とは言い難いですが，おじいちゃんおばあちゃんの家へ遊びに来たような親しみやすさを感じるようになった．また，このイベントを最後に住民の方々との交流を断ってしまうのではなく，今後も交流を続けていきたいと思う．これからも栄門地区と住民の方々との交流を深めていきたいと思っている．
4	バザールに関わる以前は栄門という名前も知らず，ただ学校がある場所という印象であった．しかし，栄門は昔，軍の施設があった場所で，現在では多くの学校があり，文教地区ともいわれているという歴史を知り，実際にまちを歩いたり，まちの方と一緒にイベントを作り上げたりなど様々な経験を通して，バザールのコンセプトにもあるように人と人，人とまちなど，つながりが生まれていくまちであるという印象に変わった．車通りの多い場所ですが，1歩まちの中に入ってみるととても落ち着いており，川を身近に感じることができたり，一息つける公園やカフェがあったりなど，栄門の良いところを知っていくうちに，卒業してもまた行きたいと思うようになった．私にとっての栄門は，学ぶだけでなく，１つのものを作り上げる中でまちの人と関わり，協力しながら活動することで自分自身の成長に繋がる経験をさせてくれた場所だと思う．
5	学校に入学した当初は，ただ学校があるまちとしか思っていなかった．栄門バザールに参加して，このまちの歴史とか現状を学んでいくうちにもっとたくさんの人に知ってもらわないといけない場所ではないかと思った．
6	今まで栄門地区との関わりが学校に通うことしかなかった．通学以外，栄門地区に訪れることがなかった．しかし，今回栄門バザールで地域の人と深くかかわり，自分にとって，通学でしか接点がなかった栄門地区で新しい今までとは違ったコミュニティを築くことができたと感じている．栄門バザールを企画，運営していく中で，まちを徐々に把握してこれまで知らなかった栄門の雰囲気を感じた．川の方は，ゆったりとしているが，3号線の方は店もあり賑わっているようなところが静と動があり栄門の良さだと思った．栄門のまちの方々とイベントを通して，イベント以外のことも知ることができた．このイベントがなければ，栄門というまちがどのような所なのか，どんな店があり，どういう人が住んでいるのかを知ることもできなかったと思う．この栄門バザールに関われることは今回で最後になると思うが，栄門の地区を通学だけでなく，時にはカフェや公園，川で過ごして，これまで以上に関わっていきたいと思った．
7	とても暮らしやすいまちだと思う．栄門パークバザールのイベントを行う上で，ゼミでまち探索を行った時に，近くに沢山の学校があって通学しやすく治安が良い，スーパーや飲食店が多い，バスの本数が多く御年寄の方でも移動しやすい，病院が多い，近くに甲突川が流れていて自然豊かである，など栄門地区は子供からご年配の方まで住みやすいまちであると分かった．また，イベントに足を運んで，楽しんで下さる住民の方が多く，栄門地区はとても賑やかで素敵なまちであると感じた．3号線から奥の方に入ると静かで空き家などが目立っていた部分がありましたが，今年はスイーツのお店が増えたり，新しくチェーン店がオープンしたりなど，更に栄門地区が発展していく兆しが見えており，今後もより住みやすいまちに姿を変えてくのではないかと思う．
8	鹿児島県立短期大学に入学し，初めて栄門地区を訪れた時から栄門パークバザールの運営に携わるまで，栄門地区は「大学のある場所」，「鹿児島中央駅や天文館から近い栄えた場所」という認識でしかなかった．しかし，バザールの運営として栄門についての知識を蓄えていくうちに，栄門地区は年々賑わいを失いつつあることや，大通りから外れると意外にも静かな住宅街が広がっていることを知った．これらの課題を解決すべく，鹿児島県立短期大学岡田ゼミでは，第3回栄門パークバザールで「謎解き街歩き」を提案した．学生の多くは運営としてイベントに参加した経験が無く苦労したが，そんな時に手を貸してくれたのは栄門地区の人々だった．近隣の店舗は賞品の協賛を下さり，運営のメンバーは会議の度に様々な視点からアドバイスを下さった．これらのお陰で，何とか企画を実行することができた．その結果，普段の栄門地区からは想像できない程，栄門公園や甲突川周辺は多くの人で賑わいを見せた．まちを盛り上げる為の協力を惜しまない人々の姿から，栄門地区の温かさを感じた．その結果，私にとって栄門地区は，初めの印象から大きく変化し，今や第2の故郷といっても過言ではない心休まる場所となった．

注）数字は表2の番号　　下線部は本文での引用部分

（アンケート調査により作成）

「どんどんこの栄門のまちに愛着が湧いてきて，大好きなまちになった」，No3「親しみやすさを感じるようになった」, No7「とても賑やかで素敵なまちであると感じた」, No8「今や第 2 の故郷といっても過言ではない心休まる場所となった」のように，学生には栄門地区に対する愛着が生まれている。さらに，表 3 の No1「卒業後，就職しても何らかの形で関わっていきたい」，No2「これからも続いていく栄門の取り組みに関わり続け，応援していきたいと思っている」, No4「今後，直接でなくても関わっていけるといいなと思った」，表 4 の No3「これからも栄門地区と住民の方々との交流を深めていきたいと思っている」，No6「これまで以上に関わっていきたいと思った」からも，学生による栄門地区とのつながりも確認できる。

なぜ学生には栄門地区への愛着とつながりが生まれたのか，学生の意識に影響を与えた理由をみると，表 3 の No3「イベントを栄門地区の実行委員の方と共につくりあげることができて嬉しかった」，No6「一緒に運営をする栄門の方々と企画会議をする中で，自分の意見を聞いてもらい，反映してもらえたことがうれしく，自分の中でボランティア活動のやりがいや楽しさを感じることができた」，No7「1 番強く感じたことは栄門というまちを大切にしている人が多いということだった」，No8「準備から当日まで様々な仕事に取り組む中で，とくにまちの人々とのつながりを強く感じることができた」，表 4 の No2「まちを盛り上げたい，にぎやかなまちを取り戻したいという熱い想いが伝わり，私もこのまちに携わりながらもっと元気で笑顔溢れるまちにしたいと思うようになった」，No3「栄門地区に深くかかわるようになって住民との交流の機会が増えた」，No4「１つのものを作り上げる中でまちの人と関わり，協力しながら活動することで自分自身の成長に繋がる経験をさせてくれた場所だと思う」，No6「新しい今までとは違ったコミュニティを築くことができたと感じている」, No8「まちを盛り上げる為の協力を惜しまない人々の姿から，栄門地区の温かさを感じた」のように，学生は地域住民，地元企業，出店者，来場者等とのつながりを強く感じている。とくに学生は「eimon park bazaar」を企画・運営する地域住民がまちを想う姿に強く惹かれ，そのような地域住民との関わりが栄門地区への愛着やつながりを生み出していると考えられる。

一方，表 3 の No4「まちの方と一緒に活動することで，通学しているだけでは知ることのできなかった栄門の歴史や栄門ならではの良さを身近に感じることができた」，表 4 の No1「まちの人と関わったり，まちのことを知っていくうちに，こんな店や公園や歴史があったんだ，こんなに多くの学校があったんだ，と発見が多く，知れば知るほど，地元のような愛着が湧いた」，No5「このまちの歴史とか現状を学んでいくうちにもっとたくさんの人に知ってもらわないといけない場所ではないかと思った」，No6「このイベントがなければ，栄門というまちがどのような所なのか，どんな店があり，どういう人が住んでいるのかを知ることもできなかったと思う」のように，地域住民との関りから学生はまちの歴史，魅力，課題に対して関心を持って学んでいたことがわかる。

Ⅵ　おわりに

本研究では鹿児島市栄門地区の「eimon park bazaar」を事例に，栄門地区の地域性や「eimon park bazaar」の運営形態を把握したうえで，学生が地域住民との協働によって栄門地区という学ぶ場をどのように捉えるようになったのかを明らかにした。

栄門地区は陸軍第四十五連隊の設置に伴って集落が形成され，それと共に発展してきたため，住民は歴史的な経緯を重んじて栄門という地名を使用している。空き家や空き店舗が増加している栄門地区においては，2019 年から栄門通り会がかつての活気を取り戻すために「eimon park bazaar」を実施してきた。第 3 回目以降には「栄門 つながる このまち 実行委員会」が地元の学校，商店街，町内会，企業と連携し，地域資源である栄門公園や甲突川沿いを活用して回遊性と滞在型の空間を創出してきた。すなわち，「eimon park bazaar」は人々をつなげ，地域に新たな価値を生み出すことで，栄門地区を住み続けられるまちへと導いている。

鹿児島県立短期大学の学生は 2020 年から栄門地区の活動に参加し，第 3・4 回の「eimon park bazaar」から企画・運営や地元企業へ協力依頼を通して地域の人々と深く関わっている。今まで学生にとって栄門地区は学校に通うだけのまちであったが，学生はまちを想って「eimon park bazaar」を企画・運営している地域住民の姿に惹かれ，地域住民と関わることで，栄門地区への愛着やつながりを持つようになった。また，地域住民との関りから学生はまちの歴史，魅力，課題に対して関心を持って学んでいる。すなわち，栄門地区の地域づくり活動が地域住民主体で内発的に行なわれ，地域に新たな価値を生み出すような取り組みだからこそ，学生はその住民の姿に惹かれて協働し，まちへの愛着やつながり，まちを学ぶ姿勢を持つことができていると考えられる。

謝辞

「栄門 つながる このまち 実行委員会」の皆様には，「eimon park bazaar」の企画・運営で大変お世話になりました。鹿児島県立短期大学の学生は栄門地区の方々と関りながら地域づくり活動に参加させていただき，貴重な経験を得ることができました。本研究を進めるに際しても，実行委員長の坂口喜代美氏をはじめとする栄門地区の方々には資料の提供と聞き取り調査に大変ご協力いただきました。以上，記してお礼申し上げます。2023 年 3 月末で筆者は鹿児島を離れますが，栄門地区の方々との活動を通じて，鹿児島生活がとても記憶に残るものとなり，愛着のある場所へと変わりました。心より感謝申し上げます。

参考文献

伊敷地域まちづくりワークショップ 2017.『伊敷地域ガイドブック』.
岩動志乃夫 2017. 地域が大学と連携して行う地域資源の再評価―大仙市の留学生モニターツアーを事例にして―. 季刊地理学. 69-1. 34-49.
栄門公民館展示資料『栄門の沿革』.
小田切徳美 2013. 農山村再生の理論と政策. 小田切徳美編『農山村再生に挑む―理論から実践まで―』岩波書店.
小田切徳美 2018. 農村ビジョンと内発的発展論―本書の課題―. 小田切徳美・橋口卓也編『内発的発展論―理論と実践―』農林統計出版.
大貝健二・水野谷武志・浅妻　裕 2018. 学生フィールドワークは離島に何をもたらし得るか. 経済地理学年報. 65-1. 29-44.
鹿児島市 1950.『鹿兒島のおいたち』.
「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1983.『角川日本地名大辞典 46』.

河本大地 2018．農山村でのフィールドワークを通じた持続可能な「関係人口」づくりの実践―兵庫県美方郡香美町小代区におけるゼミ活動から卒業生の「嫁入り」まで―．経済地理学年報．65-1．96-116.
桒田但馬 2017．農山村の再生に向けた大学の継続的な地域連携―岩手県での活動にもとづく課題提起―．季刊地理学．69-1．19-33.
作野広和 2018．人口減少社会における関係人口の意義と可能性．経済地理学年報．65-1．10-28.
指出一正 2016．『ぼくらは地方で幸せを見つける―ソトコト流ローカル再生論―』ポプラ新書.
高橋博之 2016．『都市と地方をかきまぜる―「食べる通信」の奇跡―』光文社新書.
田中輝美 2017．『関係人口をつくる―定住でも交流でもないローカルイノベーション―』木楽舎.
田中輝美 2021．『関係人口の社会学―人口減少時代の地域再生―』大阪大学出版会.
中川秀一 2018．「関係人口」からみた大学教育における地域フィールドワーク．経済地理学年報．65-1．1-9.
新名阿津子 2018．大学におけるジオパークを活用した教育活動．経済地理学年報．65-1．82-95.
初澤敏生 2017．まちづくり事業に大学が参加する意義―福島県会津地域および福島県石川町での実践から―．季刊地理学．69-1．3-18.
林　琢也 2018．地域づくりの現場で学ぶフィールドワーク教育の成果と課題―郡上市和良町を事例に―．経済地理学年報．65-1．45-60.
宮地忠幸 2018．大学生と農村住民との農業体験を通した交流活動の意義と課題．経済地理学年報．65-1．61-81.
山田浩久 2017．特集『地域連携事業に対する大学の役割』．季刊地理学．69-1．1-2.
山田浩久 2017．地方観光地のインバウンド観光に大学の能動的関与が果たす役割―山形県上山市を事例にして―．季刊地理学．69-1．50-65.